
2011年洪水とタイ政治

玉田芳史

1. 洪水が発生した理由	243
2. 沈まないバンコク	249
3. 異議申し立て	255
4. 今後の展望	258

2011年10月以後、タイの中部地方は洪水に見舞われた。1942年以來の深刻なものであった。インラック首相は12月8日に被害総額が1.3兆バーツ(約3.2兆円)にのぼると述べた⁽¹⁾。チャオプラヤー河流域の水没地域には日本企業の工場が多数あり、甚大な打撃を受けたため、日本でも大きな関心を集めた⁽²⁾。1970年代初頭にバンコク近郊で整備が始まった工業団地は、1980年代後半から首都の周辺部へと拡大し、その一部は今回の水没地域に立地していた。それはバンコクから通勤可能圏に立地するアユッタヤー県やパトゥムターニー県の工業団地であった。

表1 洪水の被害を受けた工業団地

工業団地	従業員数	投資額	資産額	損害額	工場数	日系企業数
サハラッタナナコーン	14,692	9,472	9,106	8,072	43	35
ローチャナ	90,000	56,000	86,986	74,215	198	147
ハイテック	51,186	65,312	33,294	32,078	143	100
バーンパイン	60,000	60,000	30,215	27,532	90	30
ファクトリー・ランド	8,500	8,000	2,160	1,896	93	7
ナワナコーン	128,311	180,000	92,614	86,511	227	104
バーンカディー	30,000	25,000	6,525	6,696	44	28
小計	382,689	403,784	260,900	237,000	838	451

出所：Matichon Sutsapda, 9 Dec 2011, p.101。日系企業数はジェトロ「緊急特集：タイ洪水に関する情報」(<http://www.jetro.go.jp/world/asia/th/flood/complex.html>)による。

注：金額は百万バーツ。

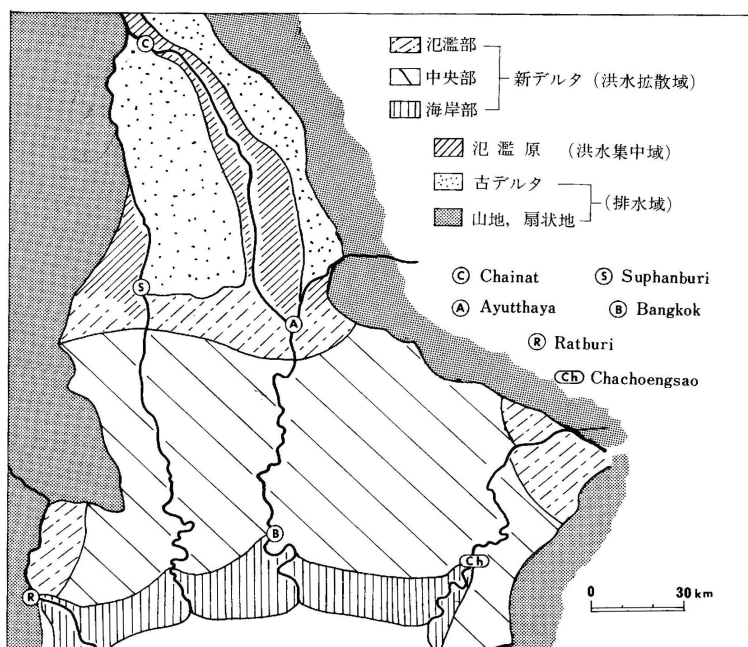
本稿は、この洪水をめぐる政治上の2つの疑問を解明することを狙いとしている。1つは洪水が発生した理由である。野党民主党はプアタイ党政権の失策と批判し、与党支持者は民主党政権の陰謀と批判している。双方が責任をなすりつけ合う余地が生まれるのは、1つにはデルタ地域を襲った水塊の一部は上流のダムからはき出されたものであり、もう1つには8月に政権交代が行われており、ダムで貯水が進められていた時期は2つの政権にまたがっているからである。洪水は人災つまり政治行政上の不手際によるのか。この政治主犯説ともいうべき捉え方の真偽を確認することが最初の目的である。もう1つは激しい水争いが生じた理由である。チャオプラヤー河の中下流域では毎年洪水が発生しているものの、2011年ほど激しい対立が住民同士の間を生じたことはなかった。類い稀な規模の洪水が発生したことによって、従来は隠されていた矛盾が一挙に表面化したのではないと思われる。それは近年の政治混乱の底流となっている社会のひずみである。

1. 洪水が発生した理由

1-1. チャオプラヤー河流域の自然環境

タイの北部地方に発するピン河、ヨム河、ナーン河がナコーンサワンで合流してチャオプラヤー河となる。ウタイターニーでサケークラーン河と合流した後、その下流のチャイナートでターチーン河が分岐し、並行して南へ流れ下る。本流の方はアユッタヤーでパーサク河と合流し、河口に近いバンコクを通過して海へ注ぐ。

図1 水文環境から見たチャオプラヤー・デルタ



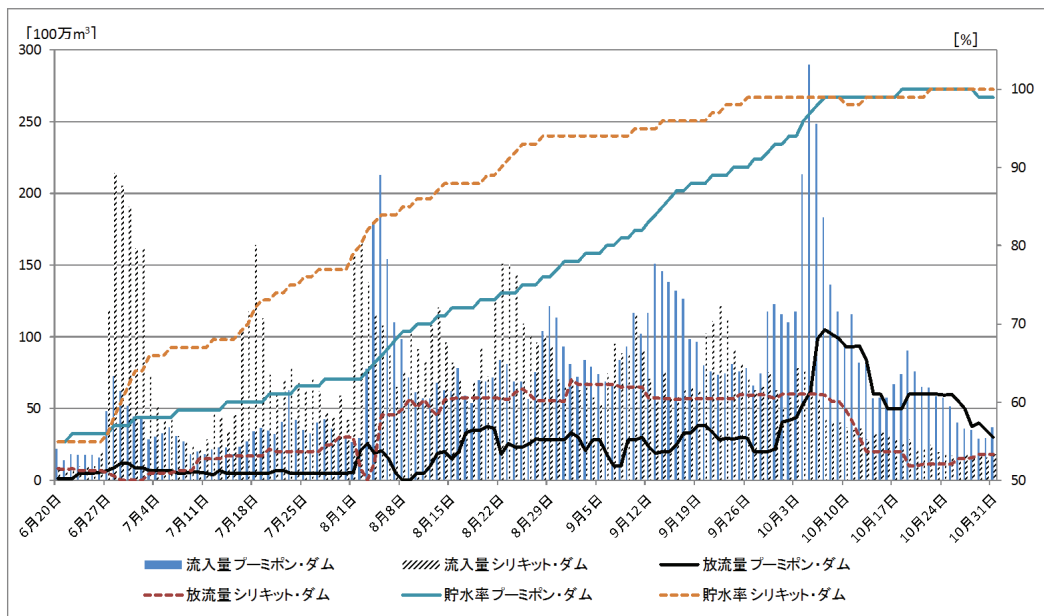
(出所) 高谷好一『熱帯デルタの農業発展』(創文社、1982年)、171頁、図68。

チャオプラヤー河流域では5月頃から雨季が始まり、雨季后半の8月に入ると雨量が増える。それに伴って河川の水位が上昇する。河川が北部山地から平地に出るピッサヌローク、ウッタラディット、スコータイといった中部平原の北辺で河川から溢れ出た水は、降雨で水を含んだ地表を這うように南へ流れ下る。高谷によれば⁽³⁾、ナコーンサワンに集まった水はデルタ扇頂部のチャイナートに到達すると、図1に示される氾濫原(洪水集中地域)に溢れた。水は続いて、アユッタヤーとスパンブリーを東西にまたぐ新デルタの氾濫部に拡散する。氾濫原も氾濫部も深く湛水するため、丈が2mを超える浮き稲が栽培される地域であった。水は、その後、新デルタ中央部へ拡散する。雨季が10月に終わっても、11月くらいまでは高い水位が続く。こうした洪水は昔から毎年生じていた。

1-2. ダムによる流量調節

この水量を調節する機能を果たすのが、ピン河のプーミボン・ダム(1964年竣工)とナーン河のシリキット・ダム(1977年竣工)である。貯水能力は前者が134億 m^3 、後者が95億 m^3 である。チャオプラヤー流域では群を抜いて大きい。両ダムは多目的ダムである。「中部平原での稲作にとってもっとも重大な問題は、水が余ることよりも不足することにある」⁽⁴⁾ため、雨季に貯水して、乾季に農業用水を供給する。灌漑局は前身が農業省に設置された当初の名称が送水局であったことに示される通り、治水よりも利水に主眼をおいてきた。そのことは2002年に灌漑局の創立100周年に刊行された書物に、「タイでは、多目的ダムの主たる目的は、飲用と農業用に水を供給することである。洪水対策、発電、水運、塩害対策は副次的目的にすぎない」と明記されているとおりである⁽⁵⁾。ただし、EGAT(発電公社)が1969年にヤンヒー電力、亜炭電力、東北電力の3社を合併して誕生したとき、ヤンヒー電力の主力発電所は建設当初にはヤンヒー・ダムと呼ばれていたプーミボン・ダムにあった⁽⁶⁾。石油ショックのさなかに完成したシリキット・ダムも発電に重要な目的の1つがあったので、両ダムはEGATの管理下に置かれている。

図2 プーミボン・ダムとシリキット・ダムの水量変化、2011年



出所: 農業・協同組合省灌漑局の水況評価分析センターのデータより筆者作成

乾季に備えてダムの貯水が行われるのは雨季の後期である。例年であれば8月以後である。2011年はどうだったのだろうか。農業・協同組合省灌漑局の水況評価分析センター

がウェブサイトで発表するタイ国内主要ダムの日々の貯水状況に関するデータ⁽⁷⁾を参照して、両ダムの流入量、放流量、貯水率の推移をグラフに描くと図2のとおりである。2011年は両ダムとも例年よりも早く4月から貯水量を増やしていた。シリキット・ダムでは6月末に1週間で10億 m^3 が流入して貯水率は10%上昇した。その後7月後半にも流入量が多く、貯水率はさらに10%ほど上昇した。加えて、8月初旬の1週間で8億 m^3 を超える流入があり、貯水率が8月2日に80%、8月8日には85%を超えた。この激増に対応して、8月5日から放流を増やした。8月1日から10月14日にかけては毎日平均5,400万 m^3 の放水が行われていた。他方、プーミボン・ダムは2010年末の貯水量が際立って少なかったため放流量を2月から少なめにし、上流からの流入量が増える5月に入っても増やさなかった。貯水量は6月になって例年においつき、以後は例年を上回った。プーミボン・ダムの貯水率は8月11日に70%に達し、9月6日に80%、そして9月24日には90%を超えた。9月末からの2週間では20億 m^3 が流入した。満水が近づいたため、10月に入ると1日あたりの放流量を4,000万 m^3 に増やし、10月4日には6,000万 m^3 を超えた。このデータから窺えるのは、第一に、シリキット・ダムでは貯水率が80%割を超えた時点で放流量を増やしたことである。8月以後の放流量は例年の4倍に達する大きな量であった。第二に、プーミボン・ダムのほうは、それとは対照的に、9月に貯水率が急上昇しても放流量を増やさなかった。この結果、10月初旬に1日あたり2億 m^3 を超える大量の流入があったとき、調整のために溜め込む余力がなく、垂れ流すように放流を行うことになった。

2011年の流入や放流の水量に顕著な特色があったのだろうか。それを確認するために、貯水や放流の状況をほかの年と比較してみよう。農業・協同組合省灌漑局のウェブサイトには2005年以後の7年間の月別の貯水量を示したグラフが公表されている。それによると、プーミボン・ダムが満水になったのは2006年と2011年の2年だけである。8割に達しなかった年も4年ある⁽²⁸⁾。他方、シリキット・ダムも同じ時期に満水になったのは2年だけである⁽⁹⁾。

また、両ダムの年度ごとの水流入と放流の累積量に関しては、ある知識人が科学技術省の水資源・農業情報研究所のウェブサイト⁽¹⁰⁾からグラフを転載しつつ紹介している⁽¹¹⁾。そのグラフによると、プーミボン・ダムへの年間の流入総量は2005年以後では50~60億 m^3 が2度(2008年と2010年)、60~70億 m^3 が3度(2005年、2007年、2009年)、80~90億 m^3 が1度(2006年)であった。灌漑局の2011年のデータでは、9月2日に60億 m^3 、9月13日に70億 m^3 、10月3日に90億 m^3 を超えた。そもそも6月初旬には累積流入量が過去数年間で最高となり、以後一貫して首位を維持し、年末までには120億 m^3 を優に超えることになった。他方、シリキット・ダムでも6月時点での流入量が過去数年間で最高となり、9月5日には過去数年の年間最高量であった75億 m^3 を超え、年末には110億 m^3 を超えた。

両ダムとも流入量は記録破りであったことが分かる。

この大量流入を前にして水害の被害を軽減するには適切な放流が必要であった。プーミボン・ダムは2005年以後では年間の放流の累積量が65億 m^3 を超えたことが3度(2007年、2008年、2009年)あった。2011年には近年では最高の流入量を記録していたにもかかわらず、放流量が65億 m^3 に到達するのは11月12日であった。これは2011年には放流が年初から抑制気味であり、8月には累積放流量が近年では最低を記録していたからである。シリキット・ダムからの放流も2011年には控え目であり、流入量が著しく少なかった2010年に迫る低水準であった。このため、8月に入って放流が激増しても、累積量が例年を上回るのは8月下旬であった。近年の年間の放流総量は、わずか39億 m^3 にとどまった2010年を除くと、60~70億 m^3 の範囲にあった。2011年には11月末時点で放流総量はプーミボン・ダムを上回る90億 m^3 であった。

大規模な洪水が発生した主因は大雨にある。2011年は北部地方の雨量が9月末までに1,541mmであり、例年を489mm上回っていた。首都バンコクの雨量も1,800mmを超えており例年の1.5倍ほどに達していた⁽¹²⁾。降雨に由来する流入量は管理できない。それゆえ、管理すべきは放流量である。シリキット・ダムのほうは流入量が増加するにつれて放流量を増やしていたといえよう⁽¹³⁾。ただし、流入量が例年の倍近くもあったため、放流量は膨大になった。他方、プーミボン・ダムについては流入に対応した放流の時期が遅く、分量も少なすぎたことが明らかである⁽¹⁴⁾。プーミボン・ダムからの放流に過少や遅延が見られたのはなぜであろうか。一部の研究者が指摘するように⁽¹⁵⁾、ダムの貯水量や放流量の決定といった日常用務に首相や内閣が逐一関与する可能性は乏しく、批判の矛先はダムを管理するEGATや灌漑局に向けられた。

1-3. EGATの弁明

EGATの総裁は11月初旬に釈明を行った⁽¹⁶⁾。2011年は5月までは貯水量が半分以下であった。6月以後は大雨により中部平原北部で洪水が発生したため、2つのダムからの放流を抑えた。その後も大きな低気圧が襲来したため、ダムは満水状態に近づいた。そこで、8月からシリキット・ダム、10月からプーミボン・ダムの放流に力をいれた⁽¹⁷⁾。EGATは総裁の説明に加えて、5つの疑問に答えるという体裁をとった「プーミボン・ダムとシリキット・ダムの放流の真相」と題する文書も配布した⁽¹⁸⁾。第一に、「チャオプラヤー河流域の水管理は小委員会で行っている。灌漑局長が委員長となり、ほかに8つの組織から委員が出ている。気象局、水資源局水資源・農業情報研究所、水路局、バンコク都庁排水事務所、災害防止・救済局、国王発案事業調整特別委員会事務所、そして発電会社である。この小委員会は水の状況を注意深く監視し、毎週毎日ダムから放流すべき水の量を検討す

る。発電会社はこの小委員会の決定に従って行動してきた。」第二は、2つのダムからの放流が今年については雨季の最初に行われなかったのはなぜなのか。5月1日時点では、貯水率はプーミボン・ダムが45.1%、シリキット・ダムが50.3%であった。貯水量をもっと増やすべき水準であった。それゆえ必要最低限の放流しかなかった。しかし、6月以後熱帯低気圧が次々と襲来し、ダムの上流でも下流でも大量の雨を降らせ、中部平原の上流部と下流部で洪水を引き起こした。しかも、支流のワン河とヨム河には大きなダムがなく、水量が増えたので、2つのダムからの放流を増やすことはできなかった。第三に、大量放流を行った理由は、ダムが満水状態に近づいており、しかも上流からの流入が大量に続くと思われて、ダムの安全を維持するために放流が必要になったからである。プーミボン・ダムでは10月5日から13日、18日から20日にかけて、シリキット・ダムのほうは8月25日から9月11日にかけてそうした放流を実施した。第四に、発電で稼ぐために貯水量を意図的に増やしていたという批判は事実無根である。発電量が増えても利益は増えない仕組みになっているからである。第五に、ダムの放流を減らしても洪水がおさまらないのはなぜか。10月29日時点でナコーンサワンを流れる水量のうち、ダムからの放流分は「16.7%にすぎない。それゆえ、2つのダムの放流が洪水の原因ではない。」それに加えて、2つのダムは7月から8月にかけて貯水し、中部地方の洪水を防いでいた。流入量は放流量を遙かに上回っている。この貯水がなければ、洪水の被害はもっとひどくなっていた。2つのダムから放流された水がバンコクに到達するまでにはほぼ2週間かかる。それゆえ、ダムからの放流分は10月末時点で「バンコクを包囲している水塊に影響を与えていない。」

しかし、EGATが主張するように2つのダムから出た水がバンコクに到達するまでの所要日数が2週間であれば、10月5日放流分は10月19日頃、10月20日放流分は11月3日頃にバンコクに到着したはずである。アユッタヤーが水没したのは10月初旬、バンコクに押し寄せる水の量が増えたのは10月下旬である。プーミボン・ダムからの放流分が新デルタ地域を襲った水塊の一部を占めていたことは間違いない。その割合が16.7%であるとすれば、水位をたとえば3mから3.6mへ押し上げることになり、増水した河川を溢れさせるには十分であろう。

1-4. 農業大臣と灌漑局の釈明

鍵を握るのは農業大臣である。彼は灌漑局生え抜きの技術官僚であり、国王側近のスラユットが率いる政権下の2007年に局長に抜擢された。2008年12月発足の民主党政権で、spanブリー県選出の元首相バンハーンが率いる政党入閣枠で農業大臣になった。彼は政界では、間違いなく、水資源管理にもっとも精通している。2011年総選挙に立候補せず、

同党の閣僚枠でインラック政権でもそのまま農業大臣に居残った。これはタイ政治では異例なことである。1つは入閣希望者が目白押しの下院議員を押しよける形で入閣したことである。もう1つには、弱小な連立与党の1つでありながら、プアタイ党にとって垂涎的となる農業省という利権の大きな省を得たことである。元首相の勢力圏が新デルタ地域にあり、水の管理が集票につながるが一因であろう。上流部の大規模ダムとは別に、デルタ地域でのチャオプラヤー河の水管理はデルタ扇頂部のチャイナートに建設されたチャオプラヤー・ダムと呼ばれる堰で行う。この堰で、水は西、東、南に縦横無尽につながる水路網へと振り分けられる。水路網の管理者は灌漑局であり、管轄するのは農業大臣である。

2011年11月10日、野党議員は国会でこの農業大臣の責任を追及した。議員によると、財務大臣は2011年10月28日に自らのフェイスブックに、「ダムの貯水量を半分に減らしておけば洪水の被害はもっと軽かったであろう。減水が足りなかったのは稲の三期作用に放流を控える必要があったからである。もし放流していれば、70億バーツほどの被害が農民に生じたであろう。だから政府は放流しなかった」と書き込んでいた。また、農業大臣は9月5日に、農民が稲の収穫をできるように、EGATと調整してプーミボン・ダムの放水量を毎秒2,090m³以下に抑えるように、灌漑局に指示していた。農業大臣はさらに9月8日にアユッタヤー県を元首相とともに訪問し、洪水を起こさないよう灌漑局職員に指示を出していた⁽¹⁹⁾。

追及を受けた農業大臣は、答弁で、ダムの放流の遅れが洪水を招いたことを認めながらも、ダムの管理が規則通りに行われていたと釈明した。彼によると、「7月から8月にかけてはヨム河やナーン河の流域で洪水が発生しており、シリキット・ダムから放流することはできなかった。洪水の水嵩を増やしてしまうことになるので、どの政権で大臣をしていても同じように行動したであろう。気象局の予報が1週間先までしかできないことが問題である。もし誰もが、諸葛孔明のように正しく予想できれば、国会でこんな討論をする必要などない。」他方、9月にプーミボン・ダムの放流を減らすよう指示したのは事実である。中部地方の農民が米の収穫を終えるのを待つ必要があったからである⁽²⁰⁾。

灌漑局長も10月下旬に、豪雨が相次いで放流の時機を逸したことが洪水の引き金と認めつつ、被害の拡大には人災の面があると指摘している。彼によると、アユッタヤー県やパトゥムターニー県では灌漑局職員による水門管理を、浸水を嫌う地元住民が国会議員と協力して妨害したため、計画通りに実施できなかった。それに加えて、上流では森林が伐採され、下流の首都圏では住宅地が拡大し、とりわけバンコク東部ではかつては放水帯であった地域の開発が進んで水の流れを阻害している。これらの要因が被害増幅に寄与したというのである⁽²¹⁾。

2. 沈まないバンコク

2-1. バンコクの死守

チャオプラヤー河の新デルタ地域のほぼ全域が水没する中、首都バンコクの中心部は沈まなかった。これはなぜであろうか。標高が高いからではないことはいうまでもない。バンコクはチャオプラヤー河が北から南へ貫流し、大まかにいえば西岸のトンブリー地区、東岸のプラナコーン地区、その外側に広がる東部地区の3地区から構成される。

バンコクは1980年代に洪水事情が大きく変わった。1983年にバンコクで大規模な洪水が発生し、東部地域が何ヶ月も水に浸かった。再来を防ぐため、都庁は中央政府の国道局、灌漑局、国鉄と協力して、バンコクの東部と北部に高さ2.5m、長さ72kmの堤防を1985年までに築いた⁽²²⁾。それで洪水が解消されたわけではなかった。防水堤の外側は防備不十分なままに放置されていた。内側も、都内に豪雨が降れば容易に冠水した。それゆえ以後も、外部からの侵入を防ぎ、内部からの排水を急ぐ洪水対策が進められた。ある資料によると、77kmの堤構築、6,404kmの排水管敷設、1,682本2,604kmの水路整備、毎秒1,584 m³の排水能力を備えた158箇所の排水設備設置、毎秒155.5 m³の排水能力を備えた7本の巨大トンネルの整備が進められた⁽²³⁾。大枠は、首都の北辺に堤防や水路をめぐらし、下流である都内への南進を阻止し、東西方向へ強制的に大きく迂回させて海に注がせることであった。要するに、輪中化が進められたのである。さらに、都心部には15地区に0.5km²から28km²の合計18の輪中が構築された。その総面積は168km²であり⁽²⁴⁾、都の面積1,569km²のほぼ1割に相当する。こうした洪水対策の推進力は、1980年代の首相ブレイムに加えて、1985年に始まる都知事公選であった。都知事選の大きな争点は、洪水対策と交通渋滞対策であった。1990年代以後は、豪雨の後、水が路上に溢れてもじきに引くようになったのは、排水能力向上のたまものである。

2011年には上流から押し寄せた水塊はナコーンサワン、アユッタヤー、パトゥムターニー、ノンタブリーを飲み込み、次はバンコクを飲み込もうとした。しかし、押し寄せた水塊が南下してバンコク中心部に入るのを阻止するために、水門が閉められ、土嚢が積み上げられた。高いところから低いところへ流れていた水は流れを止められたのである。輪中の外側の湛水の水深が大きくなり、堤を越えて中心部に向かって南下を始めると、政府は中心部の住民の悲鳴に呼応して大型土嚢で防水堤を急遽しつらえた。このため、上流側では水が東西にも南にも流れず再び湛水が始まった。外側の住民にとっては、洪水は天災にとどまらず、人災でもあった。土嚢で作った防水堤は、洪水になってもよい地区と洪水になつてはいけない地区を区別する人為的な境界線にもなっているからである。

そればかりではない。上流のナコーンサワンやアユッタヤーでは11月下旬には水が引

いて大掃除が行われた。次に大掃除が行われたのはすぐ下流のパトゥムターニーやノンタブリーではなく、もっと下流のバンコクであった。バンコクは後から水に浸かったのに、先に水が引いたのである。これはひとえにバンコクの防水能力と排水能力が格段に高いからである。上流側の住民や県知事が水門をもっと開けるように要求しても、都知事は応じなかった。11月下旬になっても引かない水は悪臭を放つようにもなった⁽²⁵⁾。負担を押しつけられる上流側の住民が怒るのは当然であった⁽²⁶⁾。

タイにおける住民運動研究の第一人者ブラパートは、首都のトンブリー側において東西に延びる幹線水路マハーサワット運河地域に何度も足を運んだ。この運河はトンブリー地区にとって北の防衛線となっており、運河の水は東のチャオプラヤー河にも西のターチーン河にも流れず、北側のノンタブリー県は深く湛水した。彼が住民にどうして欲しいかと尋ねると、異口同音に戻ってくる返事は、「水を自然に従って流して欲しい。それが一番よい。水をマハーサワット運河からポンプでくみ出して右や左へ、つまりターチーン河やチャオプラヤー河に流そうとするばかりではなく、南 [=都内] へ流すということだ。多くのものが提案しているのに、都庁は考え方を全く変えようとしな⁽²⁷⁾。」バンコクの東の北辺にあたるパトゥムターニー県ラムルークカー地区でも事情は同じであった。首都中心部を守るためという理由で湛水を甘受させられているものの、それがいつまで続くのか、どのような救済措置が講じられるのか、他人のために犠牲を強いられたことへの特別な補償がなされるのかどうか、こういったことが分からないことに住民は強い憤りを感じていた。このため、住民たちは11月23日には実力行使に出た。土嚢堤を16mにわたって壊し、堤の上流と下流の冠水の水位をともに40~50cmにした。同日にはさらに幹線道路を封鎖して、1ヶ月以上におよぶ湛水状況の打開を政府に要求した⁽²⁸⁾。

しかし、そうした苦労や迷惑をよそに、都知事の利己的な対応を後押ししたのは、バンコク住民の身勝手さである⁽²⁹⁾。あるジャーナリストは、「バンコクの金持ちは利己心や特権に慣れ親しんでいる。・・・[その一部は、逃げ場のない庶民と違って、国内のリゾート地や国外へ避難するにもかかわらず、] 不公平なことに、バンコクが権力、貨幣、その他あらゆる重要なものの中心になっているため、防水堤や水門の外側の住民がどのような目に遭うのかを気にかけることなく、首都の中心部を洪水から絶対死守すべきと主張している」と批判した⁽³⁰⁾。都内に水が入り込み始めた11月上旬に、ある政治学者も、「バンコクが乾いており、農村部がすでに深刻な洪水に見舞われていた数ヶ月前には、バンコクの住民はそうした被災地の状況に関心や同情を示すことはなかった。バンコクが守られる限り、それらの地域や住民が苦しむことは何ら問題ではなかった。しかし、今ではバンコクの住民はもっとも声高に不平を述べている。彼らは洪水に関してひどいヒステリー状態に陥っている。彼らは食料を買いだめし、パニック状態に陥っている。皮肉なことに、[絶対死守

という発言を繰り返していた] スクムパン都知事への信頼を失ったかのようなのである。」「バンコクを守らなければならないという圧倒的な関心は、一貫した中央集権意識の反映である。いつもそうであるように、権力や繁栄はバンコクの排他的な専有物なのである。地方が脆弱で無力にとどまることは、多くのバンコク住民にとっては願ったり叶ったりである。貧しく低開発のままにとどめおくことも構わない。それゆえ、地方は洪水を堪え忍んだらよいのである」と記した⁽³¹⁾。

首都中心部防衛の根拠としてあげられるのは、経済的な価値が格段に高いということである。しかし、そうした主張に対する根本的な疑問を、ネーション紙のスッパラックはツイッターで11月20日に数回に分けてつぶやいた。「首都中心部が水に浸かると莫大な被害が生じるという言説はひどいまやかしである。タイにとって（実は世界にとっても）重要な生産拠点は首都の周辺に位置するからである。最大の稲作地帯は水に浸かっている中部平原地域である。世界中に供給する工業部品の生産拠点も首都の郊外にある。（中心部に生じるかもしれないといって）防ごうとしている被害とは何なのか。空港も、官庁街も、農業や製造業の生産拠点も浸水してしまった。何を守ろうとしているのか。守ろうとしているものは、不平等な社会における勝者という威信、つまり過去100年間にわたって終始不首尾であった開発がもたらした格差という威信である⁽³²⁾。」

2-2. 都知事と野党

首都中心部が浸水を免れたのは政治のおかげであった。政府は防衛に全力を注ぎ、支持者から批判を招くほどであった。プアタイ党や赤シャツ（反独裁民主戦線、UDD）の支持者のなかには、「プアタイ党は地方に支持基盤があるにもかかわらず、バンコクの洪水防止に全力を注いでいる。・・・与党に投票した地方住民からの支持を失うことになるかもしれない。しかも、与党に投票しなかったバンコクの多数派から支持を獲得することはないだろう⁽³³⁾」とか、「プアタイ党は多数派の支持を受けて政権を握った。ところが、プアタイ党はバンコク住民の声を恐れている。プアタイ党に投票したわけではない人々を、投票してくれた多数者よりも恐れている⁽³⁴⁾」とかといった批判が渦巻いた。

政権与党にもまして重要なのは、政府と対立して首都最優先を貫いた都知事と首都防衛を政府に強く迫った野党民主党であった。まず都知事は、水門をせめて限定的にでも開けて上流側の水深を下げて欲しいという水没地域の県知事や住民からの要請にほとんど耳を貸さなかった。国民ではなく、都民に責任を負っているというのが都知事の言い分であった。有言実行が可能なのは、地方自治に著しい不均衡があるからである。バンコクでは知事が選挙で選ばれる。しかし、それ以外の県では知事は内務官僚であり、地域住民ではなく本省を向いている。また、住民の選挙で選ばれる県自治体長の方は、県内で勤務する

多数の国家公務員を動かさず、予算規模でバンコクに大差をつけられている。この差が、洪水を押し付け合う水争いにおいて首都に有利に働いた。都知事は他県住民の迷惑などお構いなしに豊富な予算と職員を活用して首都防衛に全力を注いだからである。ある研究者はこう指摘した。「もし浸水している人々の声を大きく反映するような政治へ変化すれば、首都の住民は、乾いた道路を快適に往来できるのは、神様のおかげではなく、政策のおかげであることを実感するだろう。それは、ほかの地域の住民に長年にわたって負担を押しつけ、しかもそれがあまりにも長期にわたって続いたため、洪水は首都以外のところだけで発生するのが自然なのだと錯覚させてしまった政策である⁽³⁵⁾。」

国政との関連で重要なのは、与野党の対立と、民主政治を否定しようとする勢力の存在であろう。都知事は野党民主党の政治家である。民主党はバンコクの都議会や区議会でも多数派を占めている。民主党は2011年7月の総選挙では、首都において東部地域（と中心部の1地区）を除くと、全議席を独占した。同党にとって、首都は南部地方と並ぶ地盤であり、支持が南部ほど強固ではないため死守努力が不可欠であった。

民主党は、洪水という敵失を利用して得点をあげるために、都庁が政府の洪水対策を妨げていることを無視して、政府の対応を繰り返し批判した。同党は10月26日に声明を発表した。政府の対策は、学術的にみても、過去の経験に照らしても、地形と照らし合わせても、間違っている。民主党の調査によれば、一刻も早く海へ排水するには、水の通り道は3つある。1つはターチーン河を使う西ルートである。第二は、バンコクの中心を流れるチャオプラヤー河を使う中央ルートである。第三はバーンパコーン河を使う東ルートである。これ以外に排水を早めるために、チャオプラヤー河とバーンパコーン河を結ぶ水路があり、さらに海辺のサムットプラーカーン県の排水ポンプ施設もある。政府の排水作業が円滑に進まないのは、3つのルートのバランスが悪いからである。とりわけ問題なのは東ルートである。排水ポンプ施設が用意されているにもかかわらず、東ルートによる排水を怠っており、数日前になってやっと使い始めたばかりである。このため、主たる排水ルートはチャオプラヤー河となっており、その水位が上昇してきた。こうした対応のまずさゆえに、都心部が浸水している⁽³⁶⁾。

しかし、10月27日に、元灌漑局長プラーモートの発言が報じられた。彼によれば、「東ルートの水門を開けないために、チャオプラヤー河西岸に水が集まっているという声がある。しかし、現場がどうなっているのかを見なければならぬ。[バンコクの] 東部のチャチューンサオ県の標高はバンコクよりも高く、海の潮位も放水路の水位よりも高い。このため、周辺部からバンコクへ水が流入するのを阻止するために、水門を閉じなければならぬのである。都庁は水の通り道を理解しておらず、問題解決が混乱しているのかもしれない⁽³⁷⁾。」また、天然資源・環境省の事務次官は、東ルートの放水状況がはかばかしく

ないのは、宅地開発や道路建設によって、かつての水の通り道が塞がれ、水が流れにくくなっているためであると指摘していた⁽³⁸⁾。

衛星画像をみれば、東部のバーンパコーン河下流域ではバンコクよりも早く9月に洪水に見舞われており、10月に入っても水浸しの状態が続いていたことを確認する。10月下旬には東部に限らず、バンコクの周囲は水浸しであり、バンコク輪中は広大な湖に浮かぶ島のように見えた。バンコクが沈まないのは都庁と政府が作り出した政治的な標高のおかげであった。

2-3. 軍隊の名誉回復

洪水がバンコクに迫ろうとする10月中旬には、軍隊の動きの鈍さへの批判が生まれる一方、政府が非常事態宣言を出して、軍隊を対応に活用すべきという論調が盛り上がった。野党民主党は宣言をとりわけ強く要求した。しかし、赤シャツはクーデタの呼び水になるとして宣言に強く反対した。内閣もその必要性を認めなかった。水が刻々と南下してくると、軍首脳は非常事態宣言が不要と明言した。政府は10月21日に災害防止法31条で首相の権限を強化して対応することを決めた。

アユッタヤーで工業団地が水没し始めた10月12日に、デルタ地域を中心とする中部地方を管轄する陸軍第一管区司令官は、「軍隊が支援に当たっていないとか何もしていないとかと報道するマス・メディアがあるが、第一管区は住民を助けるためにあらゆる手を尽くしている」と述べていた⁽³⁹⁾。アユッタヤーで3つの工業団地が沈み、4番目と懸念されたナワナコーン工業団地について、10月15日に陸軍総司令官は「調べた限りでは少し安心できる。万全の備えができており、厳重な警戒が行われているからである」と述べていた⁽⁴⁰⁾。しかし10月18日に、陸軍総司令官は「軍隊は官庁や団地経営陣と協力してナワナコーンの防衛に当たってきた。ほかの工業団地に比べると準備の時間が長かったけれども、流入してくる水の量が多いため、9割以上が冠水してしまった」と述べねばならなかった⁽⁴¹⁾。10月18日にはバンコクの北部ドーンムアン空港に司令部を構える空軍が、洪水に備えて航空機の避難を始めたと発表した。水が首都に迫った10月21日に陸軍総司令官は記者会見で「上流から下ってくる水の量が多いので、防水堤を越えてバンコクに入ってくると予想される。・・・政府、軍隊、官庁は全力を傾けて、水を止め、西部と東部に流そうとしている。しかし、海への排水を急ごうとすれば、水の一部はバンコクの市内を流れる水路を通さねばならないだろう。堤防は、水の流れを一時的に止めるにすぎず、市内への侵入を阻止できるわけではない」と語って、都民に心の準備を促した⁽⁴²⁾。

軍隊はナワナコーン工業団地の防衛には失敗するものの、地方からも兵士を動員して対応に当たった。水害被害者救済に出動する兵卒の手当は、11月初旬にそれまでの1日94

パーツであったものを9月に遡って120パーツを増額し、214パーツに引き上げられた⁽⁴³⁾。軍隊の中でも陸軍は洪水対策に格別熱心な姿勢を見せた。マス・メディアは陸軍が洪水対策に活躍する場面をしきりと報道した。これは1つには陸軍の投入兵力が格段に多いからである。しかし、積極的な広報活動という面も見逃せない。それというのも、陸軍当局は、マス・メディアに対して、総司令官の洪水視察予定を知らせ、特殊車両や舟艇も利用して送迎を行い、取材や撮影の便宜を図ったからである⁽⁴⁴⁾。陸軍が全国ネットのテレビ局を2局所有していること、マス・メディアのうち政府に批判的な姿勢をとっているものが軍隊を褒めそやす報道をしたことも好都合であった。こうした広報の狙いについて、週刊マティションは2つの可能性を指摘している。1つは2010年の赤シャツ掃討作戦で多数の死傷者を出して、少なからぬ国民から恨みを買っていたため、洪水対策は名誉挽回の格好の機会であった。もう1つは軍隊の人事異動である。2006年クーデタ後の法改正により、軍将官の人事異動がほぼ制服組のみで決定されることになった⁽⁴⁵⁾。クーデタで主力となり赤シャツ掃討作戦で前面に出た陸軍第2歩兵師団の出身者が重要なポストを過剰に握るようになってきていることに⁽⁴⁶⁾、与党プアタイ党は強い不満を抱いており、政権発足早々、洪水発生前には、法改正に強い意欲を示していた。定年が2014年とまだ先のプラユット総司令官は権力基盤をいっそう固めようとするれば、政権の洪水対策に協力してそうした法改正の意欲を阻喪させようと試みるのが得策であった⁽⁴⁷⁾。マス・メディアが軍隊が活躍する場面をしきりと報道したおかげもあって、複数の世論調査では水害対策でもっとも活躍しているのは軍隊という結果が出た⁽⁴⁸⁾。

英字紙ネーションのタイ語姉妹紙である『クルンテープ・トゥラキット』と『コム・チャット・ルック』は2011年11月7日に、前日に軍隊首脳が会合を開き、インラック首相は今回の水害対策で毅然とした決定を下すことができず、その結果バンコクに洪水の被害をもたらし、国を危機的な状況に陥れているということで意見が一致した、と報じた。軍首脳は、筋違いの法律の使用、洪水対策に不向きな人材の登用、政治的な利益を期待した行動、地形に関する無知、洪水情報の開示不足、都庁との対立など、首相の欠点を12項目指摘した⁽⁴⁹⁾。軍隊は11月12日にこの報道内容を事実無根であるとして正式に否定した⁽⁵⁰⁾。ネーション紙のプラウィットは「民主主義国では、軍隊の首脳が政府の洪水対策に落第点をつけるなどということはありません」と警鐘を鳴らした⁽⁵¹⁾。

バンコクに洪水の被害が及び始めると、マス・メディアやSNS（ソーシャル・ネットワークワーキング・サービス）で政府を批判し、軍隊を褒め称える風潮が強まった。政治学者のブワントーンは、民主政治に否定的な勢力が「選挙政治を受け入れられないばかりではなく、洪水を利用して選挙政治への反対運動に人々を動員しようとしている」と指摘して、洪水が民主政治否定に利用されることへの懸念を表明した⁽⁵²⁾。そもそも普通の国では、軍隊

が災害対策に出動するのは格別賛美されるべき英雄的な行動でもない。ましてや、それがクーデタや軍事政権の呼び水になる可能性はほとんどない。しかしながら、タイでは2005年以後そうした待望論が根強く存在しているため、懸念を呼び起こすことになる。

3. 異議申し立て

確かに、政府の洪水対策には、都庁との対立、政府幹部の足並みの乱れ、政治家の党利党略優先、官庁間の調整不良、洪水情報の開示不足などの多くの問題点があり、批判を招いても仕方がなかった⁽⁵³⁾。しかし、政治学者のティティナンは、洪水問題に関して「アピシット政権を批判することなくインラック政権を批判するのは、過去の政権を批判することなく両政権だけを批判するのと同じくらい筋の通らない話である」と指摘する⁽⁵⁴⁾。洪水は19世紀末に始まる近代国家形成期から抜本的な対策を怠ってきたことに原因があると思われるからである。

歴史家のニティは、「このような大規模な災害では、どの政権でも同じようにまずい対応しかできないであろう。この不手際は、指導者の弱さよりも、制度の弱さに由来している。」「タイの選挙で選ばれた政治家は、何か公務を遂行しようとするれば官僚制に頼らなければならない。その官僚制は終始一貫して明確な縦割りで動いてきた。政治家が率先して官庁の調整に当たることはかなわない。」この点に関しては、水資源管理には9省の15部局が関わっていると指摘する研究者も、「それぞれの局や省の職務は狭い縦割りになっており、重複するところもある。職務内容によっては複数の部署に分散している。調整するものが存在しない。構造的な問題である」と述べている⁽⁵⁵⁾。

問題は統治者側だけではなく、国民の側にもある。「一部の工業団地が置かれるナコーンサワンよりも下流の地域はかつて「ウタイ原」と呼ばれていた。・・・原という地名が示すとおり [水に浸かりやすい] 低地である。[バンコクの] トンブリー側の一部の地域では水が流れない。これは古くからある水路が私人によって占拠され埋め立てられてしまったからである。[同じトンブリーの] チャランサニットウォン通りに水が溢れたのは、都庁が永続的な防水堤を建設することに住宅の所有者が応じなかったからである⁽⁵⁶⁾。」

デルタ地域では洪水が毎年生じてきた。水が河川から水田や果樹園に溢れるのは毎年のことである。バンコクの輪中化とともに、周辺部に負担が押しつけられるのも当たり前とみなされてきた。これまでは、負担を強いられるものから不平や不満が強く出されることがなかったのは、おそらく避けがたい天災とみなされていたためであろう。しかし、2011年にはそうした反発が噴出した。第一に、被害が甚大であった。第二に、水没させられる

のが必ずしも農地ではなく、住宅地や工業団地に変わっていたからであろう。農地であっても、都市近郊の換金作物の栽培地であって、農家にとっては死活問題となる。第三に、少雨であったにもかかわらず200名を超える死者を出した2010年の洪水では、浸水地域では一世帯あたり一律5000バーツの見舞金の支払いが初めて行われたほか、農地や住宅の被害にも一定の補償が行われた。ところが、経済学者のアピチャートの言葉を借りるならば、「ある住宅地が遊水地に指定されるならば、どれだけの補償が行われるのか事前に決めておく必要がある。しかしそうした取り決めが行われたことはない。自分が遊水地の住民であれば、洪水が終わった後どれだけの損害賠償を得られるという保証がまったくないので、土嚢堤を壊すであろう」ということになる⁽⁵⁷⁾。

第四に、平等化への押しとどめがたい傾向を指摘しうるであろう。ティティナンは「普段ならば首都中心部のパラゴンやセントラル・ワールドといった高級ショッピングモールをうろつく人々が、被災者支援所に出向いて寄付をしたり、救援物資の梱包や配布の作業を手伝ったりした。彼らはそれから [海辺や山のリゾート地へ向けてバンコクから] 脱出した。洪水の被害を受けているものたちは、バンコク中心部の住民によって救済されるべきであり、反抗や自助をしてはならない。首都中心部以外は救済の対象という世界観は、黄色や赤色といった政治対立の一部をなしている。田舎はバンコク都民が利便で選ぶ施しの対象と想定されている。地方や首都郊外の低所得の住民が政府の政策から自信や力をつけることは禁じられている⁽⁵⁸⁾。」

同様に、ある知識人は、「都市部住民も農村部住民も認めたくないかもしれないが、タイ社会は現在の洪水対策を有力なものが無力なものを庇護するという道徳観から眺めている。・・・水はバンコクの外へ流さねばならないという洪水対策が出てくる。なぜならば、バンコク住民は上位者、ほかの県の住民は下位者であって、下位者は不平を漏らすことなく上位者のために犠牲にならなければならないからである。上位者は、自らが危機を乗り切り、工場の操業を再開して生産が軌道に乗れば、被害を受けてすべてを失い、農地が打撃を受けてどう暮らしを立てたらよいか分からなくなっている下位者に、援助の手をさしおのべて庇護し、配下で労働者として働くことを可能にしてやる⁽⁵⁹⁾。」

別の学者もこう指摘する。「タイ社会は不平等と不公平に満ちている。不公平は久しくタイ人の生活に深く根付いており、タイ文化の一部となってきた。平等な社会へ改め、この国で生まれたものは対等な権利を享受するのであるという考え方を共有させることはきわめて難しいであろう。」「公平な社会になると期待するのが難しいのは、国の指導者たちが、バンコクの住民をほかの県の住民よりも重視する不公平な考え方に慣れ親しんできたからである。だから、首都住民の財産を守るために首都の外側の住民に負担を押しつけるという方法は、タイ的な処理方法の真髄であって、意外ではない。『国民は納得して全体

のために犠牲にならなければならない』という政府の言い分は、劣位に置かれる人々を傷つけることになる。なぜならば、国の指導者は、国民が互いに平等と考えておらず、人間としての価値が異なると考えていることを示しているからである⁽⁶⁰⁾。」

今回の洪水は、こうした不平等を前提にした考え方が社会の現実と合致しなくなっていることを明らかにした。「タイ社会は変化してきた。防水争いが生じるのはタイ人が協力し合わないからではない。30～40年前には協力し合うことができた。なぜならば、理由はさておき、社会的な地位の違いに応じた権利の大小を受け入れていたからである。しかし、今日のタイ人はそうした権利の違いを容認しにくくなっている。平等意識が強まってきたからである。大型土嚢を持ってきて水を堰き止めると、堰の外側の住民は人間としての権利が少ないという烙印を押されたに等しい⁽⁶¹⁾。」負担を押しつけたり押しつけられたりすることを自明と受け止める不平等な社会は姿を消しつつあるといえよう。

ティティナンが述べるように、この変化は近年の政治対立の反映である。赤シャツと黄シャツ（民主主義のための国民連合、PAD）の大衆を巻き込む政争において、赤シャツが求めてきたのは選挙の実施であった。普通平等選挙こそは有権者にとって1人1票という対等な権利の行使の機会となるからである。赤シャツが二重基準を執拗に批判するのは、公権力による不平等な処遇を容認しがたいからである。政治学者のシリパンによると、都民の負担を他県民に押しつけることから対立が生じている。人数が多くても政治的な発言力の小さな農民や庶民は、富裕で豪華な分譲住宅に居住する人々や工業団地のために犠牲を強いられる。「しかし、水は物質にすぎず、二重基準という言葉を理解せず、金持ちと貧乏人を区別しない。水はバンコクの中心部と郊外を区別することなく、あらゆる場所へ等しく押し寄せる。それゆえ、ほかのものに水を引き受けさせようとする対応策は狙い通りの成果を上げられないと思われる⁽⁶²⁾。」人為的な標高差ともいえる不平等が設けられることは釈然としない。それゆえ、多くのものが不平を漏らし、一部の地域では抗議運動が生じる。別言するならば、洪水の前における平等を求めることになる。不平等ではなく平等を自然と考える人々が増えれば、洪水の負担をめぐって対立が生じるのは避けがたい。

ところが、そうした傾向への理解不足や反発のゆえに、洪水を政争に利用しようとする人々もいる。10月にアユッタヤーが水没してその様子がテレビで報道されたとき、プアタイ党政権に批判的な局PBSは、視聴者からSMS（ショート・メッセージ・サービス）で送られた「チャオブラヤー河が赤シャツに罰を下した」というメッセージを選んで二度字幕で放送した⁽⁶³⁾。また、ある学者は、工業団地が水没しつつある時期に、多数の構成員を抱える赤シャツが洪水対策活動をいっさい行わないのはなぜなのか、所詮選挙目当ての政治運動に過ぎないのか、と赤シャツを批判する評論を週刊誌に書いた⁽⁶⁴⁾。赤シャツは、多くが「罰を下された」被災者であり、赤シャツと対立する勢力と比べて格別無為で

あったわけでもない。八つ当たりのように赤シャツをなじるといえるのは、洪水すらも政争に利用しようとするきわめて政治色の強い行為といえよう。

4. 今後の展望

各方面から批判を浴びた政府は2011年11月8日の閣議で、2つの委員会の設置を決めた。復興戦略委員会（SCRF）と水資源管理戦略委員会（SCWRM）である。前者の委員長にはブレイム政権などで閣僚を務めたことのある経済学者ウィーラポンを任命し、後者の顧問には国王側近のスメートを迎えた⁽⁶⁵⁾。ともにブレイム枢密院議長との距離が近く、尊敬されている人物である。クルンテープ・トゥラキット紙によれば、「2つの委員会はタクシン元首相が妹の政府への信頼を回復するために集めた精鋭チームである⁽⁶⁶⁾。」ウィーラポンは就任早々、「雨がいくら降っても、同じような事態は再び生じないと投資家に安心させる必要がある。これは絶対に達成すべき任務である。」「タイ国内には何も対策をしなくても洪水にならない土地がたくさんある。・・・7カ所の工業団地については復興を助けなければならない。しかし長期的には、ほかの県への移転もありうる」と述べていた⁽⁶⁷⁾。今回被害を受けた工業団地の多くが、高谷のいう氾濫原や氾濫部に位置していたことを想起するならば、傾聴に値する見解かもしれない⁽⁶⁸⁾。

スメートは国王発案事業調整特別委員会の事務局長を1981年から99年の定年退職まで務め、その間に94年から96年にかけてはNESDB（国家社会経済開発委員会）の事務局長も兼任していた。88年からは王室系のNGOチャイパッターナー財団の事務局長を務めている⁽⁶⁹⁾。スメートは就任直後に「洪水に関しては、国王陛下は30年以上も前から指示を下しておられる。だから、政府は私からその詳細について聞きたいのだ。私が陛下にずっとお仕えてきたからである」と述べていた⁽⁷⁰⁾。政府が国王の権威と知恵を借りようとしていることを知った上での顧問就任であった。インラック首相は洪水が首都に差し迫りつつあった10月12日に国王に拝謁して洪水対策に関する助言をもらっていたほか⁽⁷¹⁾、11月3日には陛下の助言に従って首都東部地域を放水ルートに使うことを再確認した⁽⁷²⁾。国王の庇護下に入れば、批判は大きく緩和される。政府が都合よく利用するにとどまるのか、それとも一部の知識人が懸念するように、政治が選挙で選ばれる政治家主導から公益重視を謳うテクノクラート主導へ逆戻りするのか、さらに平等化への傾向に歯止めがかかるのか、今後の動向を注視する必要があるだろう。

注

- (1) *Bangkok Post*(online), 8 Dec 2011 (<http://www.bangkokpost.com/news/local/269883/pm-flood-damage-1-3-trillion-baht>).
- (2) 柴田直治 「タイの洪水が示した東南アジアの勃興」 『世界』 2012年1月号、25-28頁。
- (3) 高谷好一 『熱帯デルタの農業発展』 (創文社、1982年)
- (4) Feeny, David, *The Political Economy of Productivity: Thai Agricultural Development, 1880-1975* (Vancouver: University of British Columbia Press, 1982), p.60.
- (5) Thai National Committee on Irrigation and Drainage, *History of Water Resources Development in Thailand* (n.p., n.d.), p.303.
- (6) Kanfaifa faiphalit haeng prathet thai, *25 pi khammungman* (Bangkok: EGAT, 1994), pp.22-25
- (7) Sunpramuanwikhro Sathanakan Nam, Krom Chonprathan, Krasuang Kaset lae Sahakon, “Tarang sarup saphap nam nai ang kep nam khanat yai thang prathet” (http://water.rid.go.th/flood/flood/res_table.htm).
- (8) <http://www.kromchol.com/DailyUDQ/GIS/DamGraph/DGraph.asp?p1=1>.
- (9) <http://www.kromchol.com/DailyUDQ/GIS/DamGraph/DGraph.asp?p1=2>.
- (10) http://www.thaiwater.net/DATA/REPORT/php/egat_lgraph.php.
- (11) Bangkok Pundit, “Bhumipol Dam: Water entering the dam, discharge of water, and capacity” , 4 Nov 2011 (<http://asiancorrespondent.com/68854/bhumipol-dam-water-entering-the-dam-discharge-of-water-and-capacity/>); do, “Sirikit Dam : Water entering the dam, discharge of water, and capacity” , 7 Nov 2011 (<http://asiancorrespondent.com/68991/sirikit-dam-water-entering-the-dam-discharge-of-water-and-capacity/>).
- (12) Walker, Andrew, “Thai flood cause revealed: rain!”, *New Mandala*, 19 Oct 2011 (<http://asiapacific.anu.edu.au/newmandala/2011/10/19/thai-flood-cause-revealed-rain/>); Do., “More data on 2011 rainfall” , *New Mandala*, 24 Oct 2011 (<http://asiapacific.anu.edu.au/newmandala/2011/10/24/more-data-on-2011-rainfall/>); Bangkok Pundit, “The Thai floods, rain, and water going into the dams Part 1” , 24 Oct 2011 (67873/the-thai-floods-rain-and-water-going-into-the-dams-part-1/).
- (13) ただし、シリキット・ダムについても、5月下旬から7月中旬にかけての時期の放流が過小であったと指摘するものもある。Bangkok Pundit, “Sirikit Dam” .
- (14) Bangkok Pundit, “Bhumipol Dam” .
- (15) Somsak Ciamthirasakun, “Phap lakthan ploi namthuam thamlai ratthaban?” , (http://thaienews.blogspot.com/2011/11/blog-post_02.html).
- (16) “Egat chief says dams ‘not to blame’ : Cause was ‘heavy rain, not mismanagement” , *Bangkok Post* (online), 3 Nov 2011 (<http://www.bangkokpost.com/news/local/264457/egat-chief-says-dams-not-to-blame>).
- (17) EGAT総裁の弁明は、11月15日付けのマティション(online版)でも報じられている。11月初旬と同様な弁明を行い、「今年の洪水は避けがたい天災に由来している。EGATは、ダムの水管理小委員会の一員として、水管理は学術的なあらゆる面からの検討に基づいて行われていたのであり、EGATとしては小委員会の決定に基づいて行動したと主張しうる」と結んでいた。“Ko.fo.pho. to kho klaoha kep nam wai phoem kha fai yom rap rabop tuanphai prathet yang mai sombun” , *Matichon* (online), 15 Nov 2011 (http://www.matichon.co.th/news_detail.php?newsid=1321272776&grpId=01&catid=&subcatid=).
- (18) EGAT, “Kho tetcing ruang kanrabai nam khong khuan phumiphon lae khuan sirikit” .
- (19) “Niphit ngat khomun chae ‘Thira’ sang chalo rabai nam khuan huang mai dai kio khao khwae phan nam liang ‘Suphan’” , *Matichon* (online), 10 Nov 2011 (http://www.matichon.co.th/news_detail.php?newsid=1320917980&grpId=00&catid=&subcatid=).
- (20) Ibid; “I ordered a delay in the release of water from dam : Theera” , *The Nation* (online), 11 Nov 2011 (<http://www.nationmultimedia.com/politics/I-ordered-a-delay-in-the-release>).

- of-water-from-dam-30169695.html). ただし、気象局長を経験した防災専門家(サミット・タムマサロート)は、2011年10月に新聞に掲載されたインタビューで次のように指摘している。気象局は長期予報を行っている。しかし誰も利用しない。灌漑局やEGATに情報を伝えても尊重しない。予報を使えば、いつ頃どれくらいの雨が降るのかは予想できる。“Phai kanmuang raeng kwa phai thammachat”, *Thai Post* (online), 30 Oct 2011 (<http://www.ryt9.com/s/tpd/1269909>). また、気象局が予報の精度を上げるためにレーダーなどの更新予算40億バーツを要求したのに対して、拒否したのは民主党のアピシット政権であったことも見過ごしてはならないであろう。気象局によれば、既存の設備では2011年の豪雨は予想できなかった。Bangkok Pundit, “Thailand: Why was so much water kept in the dams? Part II”, 18 Oct 2011 (<http://asiancorrespondent.com/67306/thailand-why-was-so-much-water-kept-in-the-dams-part-ii/>).
- (21) “Poet cai athibodi kromchonprathan ‘Chalit Damrongsak’ kae khotha borihan nam phlat”, *Matichon*(online), 24 Oct 2011 (http://www.matichon.co.th/news_detail.php?newsid=1319431735&groupid=01&catid=&subcatid=).
 - (22) Samnak Kanrabainam, Krungthep Mahanakhon “Phaen patibatkan pong kan lae kae panha nam thuan krungthep mahanakhon pracam pi 2554” (http://dds.bangkok.go.th/News_dds/magazine/plan54/Plan_DDS%202554.pdf).
 - (23) Sathian Wiriyanphongsas, “Nam lae amnat song nakkhara uthokkaphai”, *Nation Sutsapda*, 11 Nov 2011.
 - (24) Samnak Kanrabainam, Krungthep Mahanakhon, op.cit.
 - (25) Noppaphatcak Attanon, “Chiwit nua big bag chiwit tai nam”, *Nation Sutsapda*, 25 Nov 2011, pp.28-29.
 - (26) “‘Big Cleaning Day’ wan ko.tho.mo. cai dam ru ‘Big Bag’ pit thang duan”, *Matichon Sutsapda*, 25 Nov 2011, p.14.
 - (27) Praphat Pintoptaeng, “Naeo rop tawantok phoeng roem ton”, *Nation Sutsapda*, 25 Nov 2011, pp.12-13. 首都の中で浸水が著しかったトンブリー地区ではバンコクからの分県を求める声があった。
 - (28) “Khon nok khan nam pit thanon ru big bag pracan catkan nam lua”, *Nation Sutsapda*, 25 Nov 2011, p.15.
 - (29) たとえばタイ商業会議所会頭は、10月26日、政府にバンコク防衛に最大限の努力を払うよう要望した。“Thai Chamber urges Govt to protect Bangkok at any cost”, *The Nation* (online), 27 Oct 2011(<http://www.nationmultimedia.com/business/Thai-Chamber-urges-Govt-to-protect-Bangkok-at-any--30168636.html>).
 - (30) Pravit Rojanaphruk, “Conflict over barriers a sign of divide”, *The Nation* (online), 21 Nov 2011(<http://www.nationmultimedia.com/politics/Conflict-over-barriers-a-sign-of-divide-30170105.html>).
 - (31) Pavin Chachavalpongpui, “Bangkok doesn’t deserve its special protection and privilege”, *The Nation* (online), 9 Nov 2011 (<http://www.nationmultimedia.com/opinion/Bangkok-doesnt-deserve-its-special-protection-and--30169503.html>).
 - (32) Supphalak Kancanakhundi, “Pokpong krungthep channai khu kanpokpong kiattiphum haeng khwamluanlam”, *Prachathai*, 21 Nov 2011 (<http://www.prachatai.com/journal/2011/11/37960>).
 - (33) Phit Phongsawat, “Tiu wicha bangkhap ‘kanmuang phang muang’ ruang uthokkaphai”, *Matichon*(online), 7 Nov 2011 (http://www.matichon.co.th/news_detail.php?newsid=1320639501 &groupid=01&catid=&subcatid=).
 - (34) Kham Phaka, “Cat tem ruang nam thuan (+ top twittter)”, *Prachathai*, 19 Nov 2011 (<http://www.prachatai.com/journal/2011/11/37938>).
 - (35) Somchai Prichasinlapakun, “Khun chai model”, *Krungthep Thurakit* (online), 10 Nov 2011 (<http://www.bangkokbiznews.com/home/detail/politics/opinion/somchai/20111110/418160/%E0%B8%84%E0%B8%B8%E0%B8%93%E0%B8%8A%E0%B8%B2%E0%B8%A2%E0%B9%82%E0%B8%A1%E0%B9%80%E0%B8%94%E0%B8%A5.html>).
 - (36) “Po.cho.po. radom samong sanoe 4 kho kae wikrit sua daeng ok rong pat mi ‘aphisit’ rap khong boricak”, *Daily News* (online), 27 Oct 2011 (<http://www.dailynews.co.th/newstartpage/index>).

- cfm?page=content&categoryID=8&contentID=172369).
- (37) “‘Pramot’ caeng withi rabai nam fang tawan-ok chi ko.tho.mo. at mai khaocai kandoen thang khong nam” , *Prachathai*, 28 Oct 2011(<http://www.prachatai.com/journal/2011/10/37644>).
- (38) Ibid.
- (39) “Maethap 1 poet cai ya to wa thahan yan pho.bo.tho.bo sang cat tem chuai nam hutam” , *Krungthep Thurakit* (online), 13 Oct 2011 (<http://www.bangkokbiznews.com/home/detail/politics/politics/20111013/413508/%E0%B9%81%E0%B8%A1%E0%B9%88%E0%B8%97%E0%B8%B1%E0%B8%9E1-%E0%B9%80%E0%B8%9B%E0%B8%B4%E0%B8%94%E0%B9%83%E0%B8%88%E0%B8%AD%E0%B8%A2%E0%B9%88%E0%B8%B2%E0%B8%95%E0%B9%88%E0%B8%AD%E0%B8%A7%E0%B9%88%E0%B8%B2%E0%B8%97%E0%B8%AB%E0%B8%B2%E0%B8%A3-%E0%B8%A2%E0%B8%B1%E0%B8%99-%E0%B8%9C%E0%B8%9A.%E0%B8%97%E0%B8%9A.%E0%B8%AA%E0%B8%B1%E0%B9%88%E0%B8%87%E0%B8%88%E0%B8%B1%E0%B8%94%E0%B9%80%E0%B8%95%E0%B9%87%E0%B8%A1%E0%B8%8A%E0%B9%88%E0%B8%A7%E0%B8%A2%E0%B8%99%E0%B9%89%E0%B8%B3%E0%B8%97%E0%B9%88%E0%B8%A7%E0%B8%A1.html>).
- (40) “Prayut yon rattaban tatsincai chai pho.ro.ko. chukchoen chi pho.ro.ko.mai samkhan thao khwam ruam mu prachachon nae yut thalo kan” , *Matichon* (online), 15 Oct 2011 (http://www.matichon.co.th/news_detail.php?newsid=1318669689&grpId=00&catid=&subcatid=).
- (41) “Pho.bo.tho.bo. yan wang ku ‘nawanakhon’ huang ko.tho.mo. caophraya lon taling” , *Thai Rat* (online), 18 Oct 2011 (<http://www.thairath.co.th/content/pol/210231>).
- (42) “Pho.bo.tho.bo. lan mai mi khrai ngo patiwat chuang nam thuum lui chuai po.cho.cho.” , *Thai Rat* (online), 21 Oct 2011 (<http://www.thairath.co.th/content/pol/210950>).
- (43) 首都の洪水が一段落ついた11月下旬には、軍隊は空軍を中心として123億バーツの復旧予算を要求することになる。
- (44) “Nam thuum hai rip tak thahan hiro” , *Matichon Sutsapda*, 4 Nov 2011, p.18.
- (45) 3軍の総司令官、国軍最高司令官、国防次官の制服組5名と、国防大臣1名(副大臣が任命されるともう1名)の多数決で決定することになった。制服組は基本的には縦割りで互いに干渉し合わない、各自の意向が通ることになる。
- (46) 拙稿「クーデタとその後」『国際情勢紀要』第80号、165-180頁参照。
- (47) “Nam thuum hai rip tak thahan hiro”.
- (48) 10月26日から29日にかけて首都圏の2136人を対象としてスワン・ドゥシット教育大学が実施した今時の洪水に関する調査では、頼りになったのは軍隊84.48%、マス・メディア80.24%、政府71.11%、都知事・都庁70.22%であり、献身を評価するのは軍隊93.16%、首相91.06%、マス・メディア88.48%、都知事・都庁73.97%であった。“Phon phoei khon ung! Ro.bo.tham nam thuum krung” , *Post Today* (online), 30 Oct 2011 (<http://www.posttoday.com/%E0%B8%81%E0%B8%B2%E0%B8%A3%E0%B9%80%E0%B8%A1%E0%B8%B7%E0%B8%AD%E0%B8%87/119087/%E0%B9%82%E0%B8%9E%E0%B8%A5%E0%B9%80%E0%B8%9C%E0%B8%A2%E0%B8%84%E0%B8%99%E0%B8%AD%E0%B8%B6%E0%B9%89%E0%B8%87-%E0%B8%A3%E0%B8%9A-%E0%B8%97%E0%B8%B3%E0%B8%99%E0%B9%89%E0%B8%B3%E0%B8%97%E0%B9%88%E0%B8%A7%E0%B8%A1%E0%B8%81%E0%B8%A3%E0%B8%B8%E0%B8%87>). この調査では、興味深いことに、バンコクで洪水が起きると考えていたかどうかという質問に、28.60%の人々が上流での洪水や水量の多さから予想していたと答えたのに対して、37.83%が想像しなかった、33.57%が分からなかったと回答している。次に、11月1日から5日にかけて首都圏の1478人を対象にしてABACが実施した調査では、援助への満足度で軍隊は9.56であり、都庁の8.34、政府の8.30を上回っていた。“Tem 10 po.cho.cho.hai ‘thahan’ 9.56 khanaen khrong cai chuai nam thuum ot phai phibat sut duatron cai choem raidai thao doem” , *Matichon* (online), 6 Nov 2011 (http://www.matichon.co.th/news_detail.php?newsid=1320548433&grpId=00&catid=&subcatid=).
- (49) “Kongthap sap ‘pu’ sop tok kae nam thuum” *Khom Chat Luk* (online), 7 Nov 2011 (<http://www.komchadluek.net/detail/20111107/114192/%E0%B8%81%E0%B8%AD%E0%B8%87%E0%B8%97%E0%B8%B1%E0%B8%9E%E0%B8%AA%E0%B8%B1%E0%B8%9A%E0%B8%9B%E0>

- %B8%B9%E0%B8%AA%E0%B8%AD%E0%B8%9A%E0%B8%95%E0%B8%81%E0%B9%81%E0%B8%81%E0%B9%89%E0%B8%99%E0%B9%89%E0%B8%B3%E0%B8%97%E0%B9%88%E0%B8%A7%E0%B8%A1.html). この記事はしかも、与党プアタイ党内部でも、「111番地」の政治家の一部から、首相更迭論が盛り上がっていると報じていた。
- (50) “Army denies Krungthep Thurakij’s report of its criticism of Yingluck government”, *Prachatai*, 12 Nov 2011 (<http://www.prachatai.com/english/node/2885>).
- (51) Pravit Rojanaphruk, “No hope for democracy if backing for Army rule continues”, *The Nation* (online), 16 Nov 2011 (<http://www.nationmultimedia.com/politics/No-hope-for-democracy-if-backing-for-Army-rule-con-30169964.html>); また、Prawit Rotcanaphruk, “Kantokyam sathana ‘phiset’ khong thahan nai wikrit nam thum”, *Prachathai*, 17 Nov 2011 (<http://www.prachatai.com/journal/2011/11/37892>)も参照。
- (52) Phuangthong Phawakkhaphan, “Cap ta krasae totan kanmuang luaktang”, *Prachathai*, 10 Nov 2011 (<http://www.prachatai.com/journal/2011/11/37809>).
- (53) たとえば国民への情報伝達に関して、防災専門家は「政府は、前もって、国民に、危険について警告を出し、情報を伝えるべきである。水かさが肩や首まで上昇してから避難を呼びかけるようでは間に合わない。」「テレビに出て喋っている学者は災害の専門家ではない。事実に対することを喋っていることもある。」「見下しているわけではないけれども、事実を知らないのであれば、喋るべきではない。話せば、国民がストレスをためるだけである」と指摘している。“Phai kanmuang raeng kwa phai thammachat”, *Thai Post* (online), 30 Oct 2011 (<http://www.ryt9.com/s/tpd/1269909>).
- (54) Thitinan Pongsudhirak, “Flood flavours”, *New Mandala*, 6 Dec 2011 (<http://asiapacific.anu.edu.au/newmandala/2011/12/06/flood-flavours/>).
- (55) Aphichat Sathitniramai, “Namthum nai phawa thi konkai rat yaekyoi lae sangkhom mai wai cai kan”, *Prachathai*, 10 Nov 2011 (<http://www.prachatai.com/journal/2011/11/37801>).
- (56) Nithi Iosiwong, “Bot rian thi rian yak”, *Maticchon* (online), 12 Dec 2011 (http://www.maticchon.co.th/news_detail.php?newsid=1323681159&grpid=&catid=02&subcatid=0207).
- (57) “Mua nakwichakan - panyachon krungthep ni uthokkaphai pai chiangmai con tong poet wong sewana ‘nam thum (pak)’”, *Prachathai*, 9 Nov 2011 (http://www.maticchon.co.th/news_detail.php?newsid=1320844905&grpid=01&catid=&subcatid=). 補償に関しては、負担を押しつける側に「洪水税」を支払わせるべきという意見を多くのものが主張した。
- (58) Thitinan Pongsudhirak, “Flood flavours”.
- (59) Krasop Sai, “Sinlatham kap withi kancatkan nam thum”, *Prachathai*, 14 Nov 2011 (<http://www.prachatai.com/journal/2011/11/37858>).
- (60) Adit Itsarangkhun Na Ayutthaya, “Nam thum khwamkhatyaeng lae kanlamoet sit”, *Prachathai*, 28 Nov 2011 (<http://www.prachatai.com/journal/2011/11/38064>).
- (61) Nithi Iosiwong, “Bot rian thi rian yak”.
- (62) Siriphan Noksuwan Sawatdi, “Hen arai nai sai nam?”, *Prachathai*, 4 Nov 2011 (<http://www.prachatai.com/journal/2011/11/37752>).
- (63) Nithi Iosiwong, “Sing thi thuk thing nai yam mai thing kan”, *Maticchon* (online), 7 Nov 2011 (http://www.maticchon.co.th/news_detail.php?newsid=1320662361&grpid=01&catid=&subcatid=). ニティによれば、「被災者を踏み台にして再び権力を握ろうとする野党政治家とそれに同調するマス・メディアの努力に、ここ4、5年の分裂したタイ社会の状況が改めて投影された。」タイ人には仲間意識が欠落していると了解するならば、「[当該] SMSを送信した人物、それを選んで放送したテレビ局職員、食料買い占めに狂奔する人々、人間の遺体よりも焼けた映画館やショッピング・センターに涙を流すバンコクの中間層、制度よりも個人への忠誠要求、憲法よりも刑法を重視する裁判官」といった醜いことに合点が行く。
- (64) Ukrit Patthamanan, “Sua daeng hai pai nai”, *Maticchon Sutsapda*, 14 Oct 2011, p.32.
- (65) “Dr. sumet dr.krong pu ruam po.tho. funfu catkan nam”, *Khao Sot* (online), 9 Nov, 2011 (http://www.khaosod.co.th/view_news.php?newsid=TUROd01ERXdNVEE1TVRFMU5BPT0=§ionid=TURNd01RPT0=&day=TWpBe1TMHhNUzB3T1E9PQ=)
- (66) “Buanglang 2 thim funchuaman ku wikrit sattha ratthaban”, *Krungthep Thurakit* (online). Nov 9, 2011 (<http://www.bangkokbiznews.com/home/detail/politics/analysis/20111109/418194/>)

- %E0%B9%80%E0%B8%9A%E0%B8%B7%E0%B9%89%E0%B8%AD%E0%B8%87%E0%B8%AB%E0%B8%A5%E0%B8%B1%E0%B8%872%E0%B8%97%E0%B8%B5%E0%B8%A1%E0%B8%9F%E0%B8%B7%E0%B9%89%E0%B8%99%E0%B9%80%E0%B8%8A%E0%B8%B7%E0%B9%88%E0%B8%AD%E0%B8%A1%E0%B8%B1%E0%B9%88%E0%B8%99-%E0%B8%81%E0%B8%B9%E0%B9%89%E0%B8%A7%E0%B8%B4%E0%B8%81%E0%B8%A4%E0%B8%95%E0%B8%B4%E0%B8%A8%E0%B8%A3%E0%B8%B1%E0%B8%97%E0%B8%98%E0%B8%B2%E0%B8%A3%E0%B8%B1%E0%B8%90%E0%B8%9A%E0%B8%B2%E0%B8%A5.html)
- (67) “Yinglak soptok yum camuk sumet krong hai cai sang phap chu wara haeng chat” , *Thai Post* (online), 9 Nov 2011 (<http://www.thaipost.net/news/091111/47833>)
- (68) 2011年の雨量が多かったといっても、例年の1.5倍ほどである。ピン河とナーン河については、多目的ダムを治水のみに活用することは弊害が大きいかいけれども、両ダムを空にして雨を待てばすべて貯水しうる水量であった。それでも大洪水が発生するというのは、洪水と共生する環境、見方を変えれば工場や住宅が洪水の脅威に晒される環境になっているといえるかもしれない。洪水対策としては、放水路や放水トンネルを整備するという案は、河川や水路の水位に対する海の潮位を考慮すると、さほど効率的に機能するとは思えない。多くの遊水池を設けるという案も、首都圏の地価を考えると現実的ではない。与党議員が提案する遷都は政治的な理由で実現困難であろう。せめて工場だけは浸水しにくい地域へ移転するというのが現実的な対応ではなかろうか。
- (69) スマートについては、Phinyaphan Photcanalawan, “Hok klap chiwit ammat hok rop naksat sumet tantiwetchakun” , *Prachathai*, 26 Aug 2011 (<http://www.prachatai.com/journal/2011/08/36646>)が秀逸である。
- (70) “‘Sumet-wiraphong’ 2 huahok ‘dream team’ catkan nam cat phang prathet” , *Matichon*(on line), 10 Nov 2011, p.2 (http://www.matichon.co.th/daily/view_news.php?newsid=01p0111101154§ionid=0101&selday=2011-11-10).
- (71) “Yinglak thawai raingan nailuang nae hai reng rabai nam long thale” , *Matichon*, 14 Oct 2011, p.1(http://www.matichon.co.th/daily/view_news.php?newsid=01p0101131054§ionid=0101&selday=2011-10-13).
- (72) “Govt ‘will heed’ His Majesty’s advice : PM” , *The Nation* (online), 4 Nov 2011 (<http://www.nationmultimedia.com/national/Govt-will-heed-His-Majestys-advice-PM-30169182.html>).

